

革新主義時代における都市政治

— シカゴの場 合 —

志 邨 晃 佑

【要約】 革新主義期の合衆国において、工業化・移民流入・都市化による諸矛盾を集中的に表現したとされてきたのはボス＝マシンであり、その打倒は多様な改革運動のあらゆる局面にかかわっていた。しかしシカゴの事例の検討からは以下の暫定的結論が得られる。この期の都市問題の根底にあった社会的・政治的な分裂と対立にまず取組み、一定限度の社会的・政治的統合を達成したのは、ボス＝マシン自体である。ボス＝マシンに反対した改革派は、彼らの社会的地位を反映して、より徹底した統合を、ヤンキー・プロテスタント倫理による社会統合と企業モデルの政治統合を追求したが、その路線は二〇世紀アメリカの多民族社会の現実に適応し難い。それゆえボスと同様に特定の価値観の政治的強制を拒否し、諸移民グループへの福祉の拡大と彼らの政治参与を通じて都市社会の再建と統合を求める新しい改革派が登場をみる。ニューディール改革につながるのはむしろこの路線である。

史林 六三卷三号 一九八〇年五月

一 はじめに——革新主義とボス＝マシン政治

合衆国における革新主義運動の解釈は、今日いちじるしく多様化し、何らかの意味でまとまりをもったそのような運動の存在自体を否定する見解すら出現している^①。しかし、十九世紀末から二〇世紀初頭にかけての多様な改革運動を出現せしめた背景が、急激な工業化、大量の外国移民の渡来、都市の成長という三条件であることについては、史家の一般的合意のみられるところであり、また、それら三条件が生み出した多くの問題が都市に集中していたことも、改めていうまで

もない。

都市問題の最大の焦点はボス・マシン政治にあった。革新主義の諸改革運動の多くは都市起源であり、とりわけ、マシン政治の打倒による市政の浄化・改革を目標としていた。「直接民主制」のための改革とされた多くの政治改革——投票の簡素化、直接予選制、住民発議制、法案に対する直接投票、連邦上院議員の直接選挙など——は、ボス・マシン制度の排除の名においてなされた。革新主義の重要改革とされる大企業、公共企業の政府による規制も、コルコラの指摘する大企業自体による企業体制の安定と能率の追求に加えて、企業と政治マシンの結託をたち切り、政界と財界両方の浄化と合理化を計る意図から追求された。革新主義改革のいま一つの重要分野をなす社会・労働立法——少年・女性労働者の保護、工場の安全・衛生規制の強化、労災保障制、スラムの環境改善など——も、マシンの政治基盤であった都市の下層労働大衆を対象としており、それらの立法の推進力は、改革者たちのいわゆる「人道主義的関心」と社会・経済体制の安定をめざす経済エリートと一部の政治家の配慮に加えて、マシンの政治基盤を掘り崩そうとする改革派の願望をも含んだ。④改革気運と並行して盛り上り、少くとも主観的には一大改革運動として展開された禁酒法運動も、その中心組織である「反酒場連盟」の名が示す通り、マシンと都市下層大衆との連結点である「人民のクラブ」・酒場を第一の攻撃対象としていた。

要するに、マシンへの攻撃は革新主義の諸改革運動の重要な口火となり、革新主義時代を通じて続けられた。のみならずそれは、改革運動が退潮期に入ってからでも存続した。革新主義の際立った市政政治機構改革である委員会市政の採用は一九一四年にピークを迎え、その一層徹底した改革方式である市支配人制は一九二〇年代に本格的な普及をみたのである。⑤

ところで、政治マシンないしは市政改革の理解については、長らく革新主義時代の改革者自身の見解や高名なジェームズ・ブライスの解釈が有力であった。つまり、マシンは、公共的利益を推進する政治という観念を持たず、政治の中で自

己の私利のみ追求する職業政治家の組織であり、それを支えたものは、大都市の「無智で操作され易い移民」大衆であり、かつ、このようなマシンの政治支配を許したのは、健全な中産・上層市民の政治的無関心(ないしは俗悪な政治への嫌悪、自己の企業活動への専念、また一部の貪欲な企業家のマシン利用)である、とする見解である。したがって市政改革は、健全な市民たちの積極的な政治参与、彼らの政治的発言力を保障する制度的改革(予選制、住民発議制、レフェレンダムなど)、逆に、移民・労働者大衆の投票比重を減殺する制度改革(たとえば投票区アト・クワイ・エレクトションの拡大)、マシンの組織維持の鍵である公職免権パブリック・エリミネーションの除去、資格試験による官吏登用、その上に立つ市政府の中央集権化、とくに市長権限の強化、さらに党派性を排除した専門行政官による「科学的な」市政運営(とくに市支配人制)に求められた。

このような理解を貫くものは、都市の移民・労働者大衆は無智で非理性的であり、政治を私利追求の場とするマシンによって専ら操作される存在であり、他方、旧来のアメリカ人、とりわけ中産・上層の市民は、政治参与において私利追求から解放されており、社会全体の公共的利益の観点に立って行動する、とする仮定である。都市政治における基本的マインズ要因とされたものは下層の移民・労働者大衆であり、プラス要因は旧来のアメリカ人の「金持階級」であった。都市拡大と企業活動の増大のなかで生じた前者の増加と後者の政治的引退が、合衆国における市政を「一つの際立った失敗」たらしめた^④、と捉えられたのである。このような仮定は、科学を武器とする専門家は、社会運営について、公平で合理的な判断をなしうる、とする革新主義時代に有力であった仮定と同様、必ずしも実際の経験に支えられたものではない。それは、改革者たち、あるいは初期の理論家が属した社会階級の価値観を、いわばア・プリオリの前提としたマシン観であり、解決策の提示であった。

むしろ、そのような見解に対する批判は数多く出現している。たとえば、ゴスネルは、都市の移民・労働者大衆がたんに操作されたのではなく、彼らの生活の必要と価値観からの理性的選択の結果、マシンを支持した、と指摘し、ザルツァーはマシンの社会福祉機能を論じ、とりわけマートンは、マシンが当時の社会が必要とし、かつ他の諸制度が供給しえな

った諸機能を遂行したがゆえに、存続したとする重要な視点を提供した。^⑩ しかしなお、ホフスタッターは、マシン機能への理解と改革者の観念的オプティミズムへの批判を示しつつも、市政問題への基本的視角として、私的利益追求志向の移民・ボス・マシン複合体と、これに対抗する公共的利益志向のヤンキー・プロテスタント・中産・上層市民、という図式を提出し、^⑪ その図式は、ハスマッチャーの移民・ボス・マシンの改革志向性にかんする貴重な指摘や、ボス政治と市政改革にかんする多くのモノグラフにかかわらず、今日なお生命を失ってはいない。^⑫ 本稿は、革新主義時代のシカゴ市政を素材に、以上のべた論点にかんする一応の吟味を試みようとするものである。

- ① ビーター・ファイリンは、「一つの革新主義『運動』なるものは存在せず」生じたのは、さまざまな階級・グループの「多くのタイプの」運動であり、それらの間の同一性よりも、差異の方が大きく、トナリチオ。Peter G. Filene, "An Obituary for 'The Progressive Movement'" *American Quarterly* 22 (1970), pp. 20-34.
- ② Gabriel Kolko, *The Triumph of Conservatism, An Interpretation of American History, 1900-1916* (1963), 447-48. *Railroad and Regulation, 1877-1916* (1965). 476. James Weinstein, *The Corporate Ideal in the Liberal State, 1900-1918* (1968).
- ③ たとえばウイモコンシンの革新知事ラモントは、同州の企業規制立法の目的を「諸会社を粉砕することなく、それらを政界から追出すことである。……廃止されたのは特権、不利益、政治腐敗のみ」であった。Robert M. La Follette, *Autobiography: A Personal Narrative of Political Experiences* (1913), pp. 352-353.
- ④ たとはば、ノン・ナムと地区ボス・ジョー・ニコム・ニコムの戦いで、地区層民衆の支持をめぐって争奪戦を繰り広げた。Daniel Levine, *Jane Addams and the Liberal Tradition* (1971), pp. 75-79.
- ⑤ Ernest S. Griffith, *A History of American City Government: The Progressive Years and Their Aftermath, 1900-1920* (1974), pp. 56-63.
- ⑥ James Bryce, *American Commonwealth* vol. 1 (1893, 1914), pp. 644-645, 647, 649-653; Seth Law, "An American View of Municipal Government in the United States", in *Ibid.*, pp. 656-679; Bryce, vol. 2, pp. 103, 111, 114, 124-125.
- ⑦ *Ibid.*, vol. 2, p. 175.
- ⑧ トライスが短期間の合衆國滞在で膨大なアメリカ政治分析をなしたのは、彼が多数の情報提供者を組織しえたからであり、かつこれらの情報提供者は大学学長、傑出した判事や法学者、成功したジャーナリスト、上流層出身の改革者など、アメリカ社会のエリートから成り上った。David C. Hammack, "Elite Perceptions of Power in the Cities of the United States, 1880-1900: The Evidence of James Bryce, Moisei Ostrogorski, and their American Informants", *Journal of Urban History*, vol. 4 No. 4 (August 1978), pp. 363-396.
- ⑨ Harold F. Gosnell, *Machine Politics: Chicago Model* (1937); J. T. Salter, *Boss Rule: Portraits in City Politics* (1935); Robert

- K. Merton, *Social Theory and Social Structure* (1949, 1968), pp. 126-136.
- ⑧ Richard Hofstadter, *Age of Reform* (1956) pp. 8-9.
- ⑨ J. J. Huthmacher, "Urban Liberalism and the Age of Reform," *Mississippi Valley Historical Review*, XLIV (Sep. 1962), pp. 321-341.

二 ポス・ロリマーの台頭

全国の交通と商業の要衝を占め、食肉処理、印刷、機械製作、衣服などの工業を急速に発展させたシカゴは、一八七一年の大火からのわずか二〇年間に、人口を三〇万から一〇〇万に、市域を約五倍に増した^⑩。人口急増の最大要因は外国移民の流入であった。一八九〇年の人口の七八・五パーセントが外国生れ(四一%)ないしその子(三七・五%)であった。一九一〇年には人口は二〇〇万を越え、外国系(移民の一・二世)の比率は七十二パーセントに下ったが、九〇年代から急増した一段と貧困で異質の南・東欧系移民の比重が増大した。北・西欧系の比重は減じ、ドイツ系(二三・三%)はなお最大の民族グループの地位を保持したが、第二位にはロシア系(ユダヤ系を含む。一五・七%)が上昇し、以下、スカンジナビア系(一〇・七%)、アイルランド系(八・四%)、ポーランド系(六・七%)、イタリア系(五・八%)、ボヘミア系(四・五%)の順となり、加えて、すでに四万以上の黒人人口が存在した^⑪。要するにシカゴは、合衆国の大都市中、この時期に最も急成長した都市であり、ニューヨーク、ボストンに次ぐ「外国人」都市であり、しかも、これらの都市以上に多様な民族集団を含んだコスモポリタンな都市であった^⑫。それは、秩序ある市政運営の経験と伝統を欠くこの都市が、急激な拡大と移民流入による混乱と動揺の重圧を、恐らくどの大都市よりも強度に受けたことを、したがって、この時期の市政問題を最も劇的に経験したことを意味する。

⑩ M. H. Ebnor and E. M. Tobin eds., *The Age of Urban Reform: New Perspectives on the Progressive Era* (1977), pp. 156-172
所収の文献案内を参照。ホフスタッターの図式の例は「たとえは Edward C. Banfield and James Q. Wilson, *City Politics* (1967), pp. 38-43.

ところで、革新主義時代のシカゴ市政と市の政治勢力は、あまりにも急激な市の拡大・成長と流動的な人口構成のゆえに不安定であり、二大政党のいずれかの決定的優位も、ニューヨークのタマニー・ホールのような単一のマシンの支配も成立しえなかった。全国政治においては共和党がより成功し、一八九〇年から一九一六年の間の七度の大統領選挙で、民主党がシカゴで勝ったのは一度（一八九二年）にすぎないが、地方政治においては、この期の十一回の市長選挙中（二年任期、一九〇七年から四年任期）、民主党は七度勝利を収めた。^④のみならず、この期を通じて常に、民主・共和両党とも相対立する派閥ないしマシンの分裂し、これらは互に抗争し、時に妥協し、あるいは離反しつつ、政治権力を争った。それゆえ、このような派閥・マシンの抗争自体に反撥した改革派勢力の時々の勝利もまた可能であった。こうした一般的状況のなかで、共和党ボス、ウィリアム・ロリマーの台頭がまず注目しうる。

シカゴで最悪の、また全国の都市でも最悪の部類に属するスラム、ウエスト・サイドから出て、ついには連邦上院議員（一九〇九年）の頭職をかちとったロリマーは、典型的なボス政治家の経歴をたどる。彼は一八六一年、マンチェスターに生れたが、シカゴへの渡来（一八七〇年）の直後、父を失い、直ちに新聞売り子、靴みがき、賭博場や酒場の走り使い、洗濯屋の御用聞き、石炭配達などさまざまな仕事で生計を立てることとなる。十五歳からは食肉処理工場の職場を渡り歩き、一八八〇年からの五年間は、市街鉄道の運転手となり、労働組合支部の結成にも活動した。政治活動は、一八八四年の共和党大統領候補ブレインの敗北の直後からである。彼は食肉処理や市街鉄道の職場で知り合った友人・知人を集めて共和党クラブを結成し、その票を共和党候補のために動員することによって、党组织内を順調に上昇しはじめる。八五年に共和党クック郡（シカゴ市とその郊外から成る）委員、八八年、市水道局長補佐、九〇年、多数の職員任命権をもつ同局長のポストをかちとり、早くもシカゴ市共和党の有力政治家とみなされるにいたる。^⑤

こうしたロリマー台頭の足掛りは、第一に彼の組織形成にあった。彼はインシュア・アピールを行わず、専ら、共和党の選挙での勝利への貢献を通じて得られるはずの職と恩典を説くことによって、組織票をつくり出し、これを足掛りに党内

での地位を確保し、獲得した公職任命や候補者選定での影響力を用いて彼の組織を強化した。一見平凡なこのような組織形成は、当時の共和党において重要な意義を有した。

近年、十九世紀の選挙動向にかんして注目されているのは、政党選択にかんする宗教・文化的要因であり、それは、経済・階級的要因に劣らぬ、また不況時を除いては後者を上廻る影響力を有した、とされる。^⑦この見解によれば、宗教・文化的な基本的対立は、福音主義的プロテスタントとカソリック信徒との間で生じた。前者は、個人の回心の障害となる罪深い諸制度の誘惑をすべて地上から除去することを望み、究極的には公権力を用いてそれらを除去し、地上に神の王国を建設することをめざす。これに対して後者は、神の創造になる現社会を基本的に是認し、救済を教会に求める立場をとり、教会の領域である倫理の問題に世俗の公権力が立入ることに強く反対する。それゆえ政党支持に関して、前者は、アメリカ最大の悪である奴隷制反対に結集した本来「改革の党」である共和党支持に傾き、後者は公権力からの「個人的自由」^{ライバル}を唱える民主党支持に赴く傾向をもつ。^⑧十九世紀後半、大量の、しかもカソリック信徒が大多数を占める移民流入が続ぎ、工業化・都市化による社会の動揺が増すなかで、共和党に結集した人々、とりわけ福音主義的プロテスタントの旧来のアメリカ人は、酒場、売春、賭博などの排除、禁欲的安息日の遵守、公立学校を通じてのプロテスタント倫理の注入など、彼らの価値観に立つ社会の道德的再建を、党の政権獲得を通じて——共和党にすらあき足らぬ人々は第三党への結集を通じて——追求しようとする。他方、異郷の地にあつて、同朋・同信の仲間との連帯と相互扶助を頼りに生活の苦闘を続けた移民たちにとっては、彼らの社交クラブである酒場を閉鎖し、楽しみに満ちた大陸風安息日^{コンティネンタル・サバス}を禁じ、自らの価値観を次世代に伝える教区学校^{パロキヤル・スクール}を圧迫する企ては、容認し難いものであった。有権者の政治的選択に際して重大であったのは、むしろこのような日常生活に直接影響する州・地方レベルの倫理・社会立法の問題であり、国政の大問題であった関税問題ですら、地方レベルでは、経済問題としてより、個人生活の規制につながる国家権力の増大の是非という文脈で争われたのである。^⑨したがって、民族・宗教グループ間の差異や幾つかの重大な例外はあるにせよ——たとえば、南部

系プロテスタント諸派はやや民主党支持に傾き、ドイツ系ルター派は両党にほぼ支持を等分し、スカンジナビア系ルター派は強度に共和党支持に傾く——「改革の党」・共和党は福音主義的プロテスタントの、またすぐれて旧来のアメリカ人の党となり、「個人的自由」の党・民主党はカソリックの、かつすぐれて移民の党となった。当然、十九世紀後半の移民流入は概して民主党に有利に作用したのであり、それは、「叛逆と奴隷主の党」という汚名にもかかわらず、民主党が急速に回復した理由の一つを説明する。

シカゴにおける情況もこの一般的パターンに該当した。シカゴの共和党は概して、ノーナッシング党の伝統をひく酒場と公園の日曜閉鎖、賭博の禁止、移民への公職配布阻止の政策をとった。一八七三年、共和党市長ジョセフ・メディルは日曜営業禁止法の勵行を断行し、一八八九年には、州議會を握る共和党は公・私の小学校で主要教科（読み、書き、算数、歴史、地理）の英語による教育を強制した、いわゆるエドワード法を成立させた。①当然、シカゴの急成長を可能にした移民流入は民主党を利した。「開かれた街」ワイド・オープン・シティを掲げ、酒場・公園の日曜開業、教区学校における外国語による授業の許可を主張した民主党のカーター・ハリソンは、一八七九年から五期にわたる市長ポストの独占を達成したのである。②

ウエスト・サイドの第六市会选择区ウエスト・サイド・シクストにおけるロリマーの組織形成は、このような共和党劣勢の状況を打開する道を示した。一八九二年当時、同区の有権者中、旧来のアメリカ人は三分の一にすぎず、ドイツ移民とアイルランド移民がともに二五パーセント以上を占めていた。本来、民主党支持に傾いていた彼らに対し、ロリマーはプロテスタント倫理に立つ道徳的改革を説かず、専ら彼の組織への結集と、それによる物質的利益の約束を説いた。また、彼は——スコットランド系プロテスタントであったが——アイルランド系女性と結婚し、みずからもカソリックに改宗して移民グループとの一体感を強め、さらに急増中のロシア系ユダヤ人移民をも積極的に援助して隣接の地区——とくに第七市会选择区——に地盤を拡大した。③さらに彼は、同様に倫理的改革を説かず、有権者への具体的利益の配分によって勢力を築きつつあった三名の職業政治家——サウス・サイドの富裕な旧来のアメリカ人地区を握るジャミーソン、デンマーク系で、市北西部のスカン

ジナビア系移民を握るハーツ、ノース・サイドの旧来のアメリカ人、スウェーデン系、およびドイツ系有権者の間で勢力を築いたビーズ——と同盟を組み、以後一〇年にわたるロリマー・マシソン連合の基礎を築いた。程なく、市水道局長の地位を得たロリマーは、多数の職員任命に際してアイルランド系、ポーランド系、ユダヤ系の市民を登用する配慮を示し、さらに組織を強化するにいたる。^⑩

だが、ロリマーは、共和党内の有力ボスの地位に達し、共和党市長に公職任命権（パブリック・オファー）の分配を強要しうるにいたったこの段階で、大きな壁につき当る。一八九〇年、彼は望んだクック郡書記候補への指名を党指導部に阻まれ、かつ九二年の選挙では、先述のエドワード法のゆえに共和党は大敗し、ロリマー自身も州上級裁判所書記選挙に敗れるにいたる。^⑪ 障害は、共和党の指導権を握っていた有力者の偏狭なワスプ的性格にあった。その中心人物は、シカゴ・トリビューンの発行者であり、一八七一年の大火後市長に選出された先述のメディルであった。日曜休業法の強行にも示されたように、彼は強度に反移民的・エリートの態度を示した。ヘイマーケット事件の直後、彼のトリビューンは、シカゴは「社会主義的で無神論者でアルコール中毒の、ヨーロッパ諸階級中の最悪分子の会合所となっている」と論じ、八四年には、浮浪人を処理する最良の方法は、彼らの食物に「砒素を入れる」ことだ、とまで示唆した。要するにメディルは、有徳で愛国的な、また教養と企業の才能をもつ白人プロテスタントが共和党を運営すべきであると信じた。九〇年代にトリビューンの経営を引き継いだメディルの義息ペイターソン、レコード・ヘラルドほかの新聞を発行し、「改革者」と自称したコールサートも、ともにプロテスタント牧師の子で、メディルと似た思想傾向を有した。彼らは、ロリマーの言う「トラスト・プレス」を形成し、彼を、共和党を非共和党的原理に導こうとするボスとして排撃した。彼らは、自己と同階級の、同じ価値観に立つ人々が共和党を指導して政権を握り、清潔で能率的なビジネス・ライクな市政運営をなすことを望んだ。^⑫ それゆえ党指導部における彼らの発言力は、ロリマーの党内での台頭を妨害し、同時に共和党の得票力をも大きく制約していたのである。

二つの要因が、このような障害の突破を可能にした。一つは、相続く共和党敗北の教訓に立って、ロリマー自身が行った組織形成の努力である。彼は、エリート的な新聞王の命令で動く共和党でなく、グラス・ルートの大衆的組織から積み上げる共和党建設を構想した。彼は共和党クック郡委員会的主要メンバーを説得し、一八九三年秋、クック郡党大会において、党運動員が直接に住民の世話と投票動員に当る投票分区から市会选择区委員会、郡委員会、郡中央委員会へと順次代表を選出する——逆に獲得した公職は郡中央委員会から順次下部組織に配分される——ピラミッド型の郡党組織案を採択させた。ロリマー自身の努力で程なく、全投票分区で共和党クラブが成立をみ、ここにクック郡共和党ははじめて民衆ベースの党組織を建設したのである。^⑥

いま一つの要因は、一八九三年の大不況の到来であった。九三年夏の終り以後、市の製造工業は停止状態に陥り、冬には失業率は四割から六割に達した。失業、賃下げ、生活困難の中で、シカゴの全社会層が——また全国的にも——民主党から離反する傾向が生じた。九三年十二月の特別市長選挙で、共和党は僅差で勝利を逸したが、その得票パーセントは、九二年の大統領選挙に比して七・五上昇し、民主党支持を続けるアイルランド系票には食い込めなかったものの、ドイツ系、ボヘミア系、ポーランド系およびカソリックのフランス系カナダ移民の間で得票を増した。不況が深化し、激烈なブルマン・ストが発生した九四年には、民主党からの離反は一段と激化した。同年秋の一般選挙で、共和党は五一・二パーセントの得票を得て、前年末の得票率をさらに二・四上廻った。民主党の得票は三五・二パーセントとなり、前年末のそれを一四・五も下廻った。民主党票の大きな部分が人民党（得票率一二％）に流れ、しかも民主党は市の低収入層の間で際立って票を失った。不況責任を帰された与党の民主党からの離反が一般的に生じたのである。^⑦

このような状況のなかで、共和党クック郡執行委員に選出されたロリマーは、九四年秋、イリノイ州第二（連邦下院選挙）区から、連邦下院選挙に出馬した。同第二区は、シカゴ市内の四市会选择区と市外の数タウンから成るが、前者が同区の有権者の七〇パーセントを含み、その五五パーセントがドイツ系（一七・七％）アイルランド系（一五％）、およびスカン

ジナビア系、ポーランド系、ボヘミア系、スコッチ・アイルランド系（各ほぼ5%）からなる帰化市民であった。当然、彼らの大多数が食肉処理、鉄道その他で働く労働者であった。ロリマーは専ら、組織への結集による物質的利益と共和党政権による景気回復を説き、民主党と人民党の対立候補を破って当選をかちとった。彼の得票は過半数に達しなかったが、民主党票の一般的減少と人民党候補の得票に助けられた。在来民主党に投じられてきたドイツ系、ポーランド系、ボヘミア系の票が共和党に流れ、共和党にまでは投じえなかったアイルランド系の一部も、人民党への投票によって不満を表明したのである。^⑭

イリノイ州と全国での共和党復調の波に乗って、ロリマーの威信は増した。九五年の市長選挙でも、ロリマー派と「トラスト・プレス」の妥協候補であるスウィフトが大勝した。九四年に民主党から人民党に流れた票の半ばが共和党に移行したと推定される。^⑮ 当選した市長スウィフトとロリマーの間では、任命ポストの配分をめぐる激烈な対立が生じたが、クック郡共和党大会への代議員選出において、ロリマー派は市の三四の市会選挙区中、カソリック・移民・労働者が多数を占める一八の区を制した。ロリマーはついに、党のクック郡中央委員会と郡執行委員会の議長の座をかちとり、クック郡共和党の第一人者となった。九六年、ロリマーの地位はさらに安定する。共和党の大統領選、州知事選での勝利とともに、ロリマーも五五・三パーセントの得票を得て再選を果たした。ブライアンを立てた民主党は、シカゴでも労働者・移民票を大きく失って敗れた。^⑯

要するに、大不況の到来によって、在来多くの人々の最大の関心事であった宗教・文化的問題がその比重を減じ、経済的問題が最重要の問題となった。そのなかで、宗教・文化的イシューを回避し、すべての階級・グループに高保護関税による景気と雇用の回復を約束した共和党が、全国的に決定的勝利をつかんだ。逆に民主党は、不況責任の重荷に加えて、本来の党イメージ——「個人的自由」の、移民・カソリックの党——に反する農村的・福音主義的プロテスタントの候補ブライアンを立てたことによって、伝統的な支持者の離反を招き、しかも尚、その伝統的イメージのゆえに、プロテスタント

の共和党票を僅かしが奪いえなかった。^② ロリマーの台頭は、この一般的变化を代表していた。彼は、シカゴ共和党の、特定の社会規範を政治権力によって強制しようとした旧路線に反対し、宗教・民族にかかわりない組織結集による物質的恩恵を党の新しい組織原理とすることによって、共和党が基盤の狭い福音主義的クルーセードの党から、すべてのグループを機能的に統合する党へと脱皮してゆく道き——ハンナ・マッキンレーの全国指導部と並行して——切り開いていたのである。

- ① Bessie L. Pierce, *A History of Chicago*, Vol. III: *The Rise of a Modern City 1871-1893* (1957), pp. 20-49, 534-535.
- ② U. S. Eleventh Census, 1890, "Population", pp. 670-673, and Thirteenth Census, 1910, "Population", II, pp. 512-514.
- ③ John M. Allswang, *A House for All Peoples: Ethnic Politics in Chicago, 1890-1936* (1971), p. 20.
- ④ *Ibid.*, pp. 23-24.
- ⑤ Joel A Tarr, *A Study in Boss Politics: William Lorimer of Chicago* (1971), pp. 5, 8-10, 23.
- ⑥ *Ibid.*, pp. 10-11.
- ⑦ 42巻4号 Paul J. Kleppner, *The Cross of Culture: A Social Analysis of Midwestern Politics, 1850-1900* (1970); Richard Jensen, *The Winning of the Midwest: 1888-1896* (1971); Samuel T. McSeveney, *The Politics of Depression: Political Behavior in the Northeast, 1893-1896* (1972).
- ⑧ Kleppner, *op. cit.*, pp. 69-79, 100-129.
- ⑨ シカゴの「ボス」の支配を「ボス」の権威が維持する中で、ボス（シカゴのボス）の権威を強調した。 *Ibid.*, pp. 143-178.
- ⑩ *Ibid.*, p. 70.
- ⑪ Pierce, *op. cit.*, pp. 341, 343, 367-369.
- ⑫ Tarr, *op. cit.*, pp. 21-22.
- ⑬ *Ibid.*, pp. 10-14. なおロリマーは「いわゆるアイルランド系ボスの典型に属しながら、スコットランド移民として、英語の使用、アンタロ・サットン文化の理解など、アイルランド系ボスと同様の利点を有し、かつアイルランド系の地方政治支配に対する他の移民グループの反感を排せられた。
- ⑭ *Ibid.*, pp. 29-31.
- ⑮ *Ibid.*, pp. 33-34.
- ⑯ *Ibid.*, pp. 25-28.
- ⑰ *Ibid.*, pp. 35-36.
- ⑱ Kleppner, *op. cit.*, pp. 214-217.
- ⑲ Tarr, *op. cit.*, pp. 38-42.
- ⑳ *Ibid.*, pp. 43-45.
- ㉑ Kleppner, *op. cit.*, p. 288.
- ㉒ *Ibid.*, pp. 301-306.

三 ロリマー・マシンと改革派

ロリマーが築きあげた組織は、シカゴ市の政治的・社会的・経済的分裂の克服に一定の役割を果たした。都心部と周辺ないし郊外地区の対立、移民と旧来のアメリカ人との対立、移民グループ間の対立、分散的な政治機構、政党対立と党内の派閥抗争、さらに市政府自体の自決権の不足、それらは十九世紀末のアメリカ大都市の一般の問題であり、拡大し複雑化した都市生活が必要とした、市街交通、ガス、水道、電気、消防、衛生などの公私のサーヴィスの秩序ある供給を、いちじるしく困難ならしめていた。^①シカゴの場合も例外ではない。シカゴの都市圏には、それぞれ独自の課税権、独自の職員と規則をもつ十一の主要政治機構が存在し、市政府自体、市債発行権、一般課税権（タウンが有し、一八九九年以後クック郡がもつ）を持たず、市政運営の権限が州、郡、市、タウンの諸政府間で分散、重復していた。市の三四の選挙区^{ウオキッド}から選出される市議員がそれぞれ彼らのローカルな利害に基いて行動しただけでなく、市の行政・司法幹部の多くも、市長と同様に選挙で選ばれたため、一元的な統制は不可能であった。^②第一市会選挙区のカフリンとケンナ、第十九区のパワーズなど、有力な職業政治家もそれぞれの拠点で独立した政治基盤を有したため、政党組織による彼らの統制も、流動的な派閥^{マシン}のそれを越ええなかつた。

こうした状況は、時代遅れの市政機構だけでなく、市の支配的社會層の市政運営からの引退と市住民自体の分裂という事態の反映でもあった。市成長の初期に、市政を支配した建築・運輸、とりわけ商業関係のエリートは、シカゴ市の急成長を可能にした鉄道、製造工業、食肉処理などの大企業の到来によって、一八六〇年代に引退を余儀なくされた。しかも、新しい大企業のリーダーたちは、かつて自己の企業の発達と市の成長を同一視した初期のリーダーと異なつて、市政に部分的にしか関与せず、市政に自らの利害がからむ場合でも、むしろ有力政治家との個別的取引を選んだ。企業での成功が直ちに企業家の政治指導を正当化した時代はすでに過去のものとなつており、企業と社会の目標の乖離が人々に認識

され、ヤンキー・プロテスタントの社会経済倫理をもたぬ移民流入が、この傾向に迫車をかけた。^③しかも、新来の移民グループは、概して都心に集中し、周辺部・郊外に移住した旧来のアメリカ人と異なる宗教・文化を維持しつつも、それぞれに特定地区に集中して居住する傾向を示した。一八九二年当時、たとえばドイツ系は第一四、第二六市会選挙区で有権者の四〇パーセント以上を、アイルランド系、スウェーデン系、ボヘミア系、ポーランド系は、それぞれ第二九、第二三、第八、第十六区で、約三〇パーセントを占めた。また、シカゴのロシア系有権者の四二、ポーランド系の五四、ボヘミア系の六一パーセントが特定の一・二の市会選挙区に集中していた。^④この状況は、特定地区に地盤をもつ有力政治家の散在を意味したが、なお彼らの地盤自体、流動し続ける民族構成のゆえに長期の安定の維持は困難であり、しかも、全市的規模では特定のどの民族集団も小数派であったから、市の政治勢力の全体的統合は不可能に近く、時々の諸勢力の連合も極めて不安定であった。

ロリマーのマシンは、他の共和党分派との同盟や協定を通じてではあったが、数千にのぼる市・郡の公職の配布、公職立候補者と党幹部の選定、また市と州の議会への影響力を通じて、党と市政の分裂をかかなりの程度まで克服し、実質的に市政統合への道を切り開いた。それはまた、移民諸グループへの物質的援助、法的助言と援助、公私の雇傭の確保——それは、一八九一年のウエスト・パークの市雇傭者リストのみで八六八人を数えた——またマシン・メンバーへの登用を通じて、市住民の社会的統合を促進した。さらにロリマー・マシンは、民主党の有力なサリヴァン・ホブキンス・マシンと提携し、チャールズ・T・ヤーキズの市街電車会社、二つのガス会社、市・郡の公金を握るジョン・R・ウォルシュの三銀行と手を組んだ。^⑤それは、分裂した市政府の諸機関や市会議員個々の抵抗や利権強要に悩んでいた公共的企業にとって、営業特権や認可の獲得を容易にする神経中枢が出現したことを意味した。

しかし、このようなロリマーによる一定限度の市政統合は、ヤンキー・プロテスタントのエトスから見て容認し難い欠陥を伴っていた。それは、ウエスト・サイドの、(このエトスからすれば)能力を欠く、移民系市民の政治権力への参与を

許し、特定の企業に恩典を与え、マシンの活動と貧困な市民への援助に必要な資金を、政治汚職を通じて入手していた。ロリマー自身、いわゆる「オホネトクゾウワト廉潔な汚職」に長じ、石炭、建設、練瓦等、いずれも市・郡政府との契約を主とする会社を経営し、一九〇九年には、公金の預金をねらう銀行をも設立するにいたる。^⑥ 加えてロリマー・マシンは、既述のように党内の他の数人のボスト、さらに民主党のサリヴァン・マシンの連合体であり、情況によっては同盟ボスの離反が生じる可能性を秘めていた。

不況は共和党の機能的統合政党への脱皮を促進し、シカゴにおいて、その路線によるロリマーの台頭を導いたが、他方、中産・上層の市民の間で体制動揺への危機意識を醸成し、また窮迫した市財政を圧迫する市政の腐敗・浪費に対する関心を強めた。

一八九三年秋、深まる不況と一猟官者による市長ハリソンの射殺という衝撃のなかで、イギリス人記者ウィリアム・ステッドの呼びかけで催された大衆集会から、シカゴ市民連合シウイック・フデレーションが誕生した。市民連合は、すべての市会選挙区に協議会カウンシルを設け、失業救済、労資紛争の調停、教育、市街整備、市民道徳など広範な問題と取り組むとともに、公共的企業への営業特権賦与をめぐる市会の腐敗の調査を開始し、とりわけ、各選挙区で腐敗議員の排除、正直で有能な候補者の選出を計る政治行動委員会を発足せしめた。^⑦ 市民連合の政治活動は、九六年、都市投票者連盟ミューニシヤル・ヴォーテヤーズ・リョに引きつがれ、シカゴ市政の刷新が開始された。連盟は、現職市会議員の汚れた記録を公表し、各区の党委員会に圧力をかけて正直な候補の指名を要求し、また党籍を問わず、連盟が推薦するような候補への投票を呼びかけた。この年、半数改選の市会議員選挙で、連盟が非難した現職議員二六名のうち十六名は党の指名を拒まれ、残る一〇名中四名も落選し、いわゆる「グレイ・ウルツズ灰色の狼たち」は大打撃を受けた。^⑧

連盟推薦の「安全」議員の増加は、ロリマー・マシンの組んだシカゴの市電王ヤーキズの敗北に示された。九〇年代にシカゴの市街鉄道の電化・路線統合を強引に推進した彼は、九七年二月、ロリマー派の州議員ハンフリーを通じて、州

委員会による規制の下に彼の会社の営業特権を四〇年間延長する法案を提出した。投票者連盟を中心とした市の改革派は、これを市の自治権への侵害であり、市に対する同社の財政的補償もまた少いとして強く反対し、公共的企業と政治マシンの結合に対する反対世論の結集を計った。ハンフリー法案は四月に州上院を通過したが、同年の市長選挙では、改革派の推す共和党員ハーランが独立候補として出馬し、共和党票の分裂とロリマーが推した共和党候補シアーズの敗北を招いた。非難の高まりのなかで、ヤーキズはハンフリー法案を撤回し、代えるに、州委員会による規制を除き、シカゴ市議会に五〇年間の営業特権延長の権限を認めたアレン法案をもってした。アレン法案は州議会を通過した。しかし九八年四月の市議員選挙では、市会による営業特権延長の決定を阻止するに足る数の投票者連盟推薦の議員が当選を確保し、ロリマーの重要な同盟ボスであったハーツとピーズが反対派に転じ、民主党市長ハリソン二世もアレン法反対の態度を明らかにした。九八年十二月、市議会はいついにアレン法によるヤーキズの会社の営業特権延長を否決した。翌九九年、州議会もアレン法自体を廃止し、ヤーキズはすべての運輸関係資産を売り払ってシカゴを去った。投票者連盟を中心としたシカゴ革新勢力のあざやかな勝利が印されたのである。一九〇三年、リンカン・ステフェンズはシカゴを「半ば解放された、戦い続ける」都市とたたえ、〇六年、投票者連盟会長フィッシャーは、「シカゴ市議会は……正直なメンバーによって握られている」と自賛した。^⑩

このような革新運動の出現は、一面で、不況を契機に階級や職業・地位の壁を超えて、社会問題、政治問題に積極的に取組もうとする「新しい市民意識」が出現したことを意味した。^⑪ ハル・ハウスのジェーン・アダムズは、失業者の大部分を目にしてスラムの街路浄化の戦いから身を引き、「これまでで最も真剣な経済学の読書に」打ち込んだ。^⑫ ハル・ハウスと並ぶセツルメント、シカゴ・コモンスが催した「自由討論」の夕べには、毎週数百人の多様な市民が参加し、その講師陣は社会福音の指導者ワシントン・グラドン、進歩的弁護士クラレンス・ダロー、トレドの改革市長サミュエル・ジョーンズ、さらに社会主義的な労組指導者トマス・J・モーガン、アナキストのエマ・ゴールドマンまでも含んだ。^⑬ 市民連合の

結成を導いた大衆集会には、「指導的実業家と労働指導者、市政府と市の排他的上流クラブの代表たち、牧師と酒場主、賭博師と神学教授、際立った名流夫人と悪名高い売春宿のマダム、裁判所の判事たちとヘイマーケット暴動裁判で有罪判決をうけ、アルトゲルト知事の特赦で州刑務所を出たばかりの一人物が、相並んで座っていた」^⑭。

しかし、出現した革新運動の担い手の階級的性格もまた明白であった。市民連合会長のライマン・J・ゲイジは、ファースト・ナショナル銀行頭取で、九三年のシカゴ万国博の開催を引受けたシカゴ財界の巨頭であり、市民連合にはじめ参加していた労働組合もほどなく手を引いた。^⑮ 投票者連盟の初代会長コールをはじめ、連盟の執行委員七名は、一人の業界誌編集者、一人の若い法律家を除いて、すべて実業家であり、連盟を代表した政治家ウィリアム・ケントは富裕な食肉処理業者の息子で、名門イェール大学の卒業生であった。^⑯ 一八九六年から一九二〇年にいたる間の連盟の指導者五〇名中、三〇名は法律家ほかの専門職、残る二〇名は実業家であり、一人の労働者も含まれていなかった。彼らの八割がカレッジ卒業以上の学歴をもつアメリカ生れのプロテスタントであり、連盟の運動方針は超党派のそれであったが、七割までが共和党支持者であった。^⑰ 連盟の戦略は十分にプラグマティックであった。連盟は、清廉の名の高い候補者のみを推薦するのではなく、明白な腐敗の記録をもつ議員を排除するために、両党間の、また党派間の対立を利用し、次善の候補を、また時にはマシンの一員やカソリック移民の代表をすら推薦する戦略をとった。^⑱

連盟に結集した改革派の主張は、腐敗したボスと、彼らと結託した実業家の手から、政治を「人民」の手に奪回することであった。だが、彼らのいう「人民」はウエスト・サイドの貧しい移民・労働者大衆ではなかった。そのような大衆は、ケントによれば「陽気に賄賂を取り込む習慣が最悪の犯罪であること」自体を、つまりヤンキー・プロテスタントの政治倫理を「たたき込み、教え込まねばならぬ」存在であり、その上でなければ政治決定への参与を許しえない存在であった。^⑲ そして一九〇六年から投票者連盟の会長となった「改革ボス」ウォルター・フィッシャーは、「彼の提唱する……正しいコースに人民を導き入れることに自信をもつ」人物であった。彼らが求めたものは、現実的には、政治の決定権・指導権

をウエスト・サイドの「コミュニティの卑しい胸の悪くなるような分子」の代表から、「正直で有能な」彼ら自身の階級の手には、より具体的には、市の北部と南部、エヴァンストンのような郊外地区に住む主として旧来のアメリカ人から成る中産・上層の市民の手に、また彼らを代表する教育ある実業家と専門職の人々の手に、奪回することであった。彼らの目には、ボスマンが移民・労働者大衆と企業の日常利益を手掛りに「組織」を通じて行った一定限度のコミュニティ統合と政治の集権化は、「厄介で不満足な」ものとして映じた。④ 彼らは、より徹底した統合を、ヤンキー・プロテスタントの政治倫理による移民都市の統合を、また会社経営をモデルとした市政の能率的な中央集権化をめざした。市憲章の改訂を通じての超党派的な専門家スタッフによる合理的市政運営が彼らの究極目標であった。⑤

- ① Charles N. Glab and A. Theodore Brown, *A History of Urban America* (1967), pp. 167-179; Howard P. Chudacoff, *The Evolution of American Urban Society* (1975), pp. 126-128.
- ② Pierce, op. cit., pp. 335-339.
- ③ Donald S. Bradley and Mayer N. Zald, "From Commercial Elite to Political Administrator: The Recruitment of the Mayors of Chicago", *American Journal of Sociology*, LXXX (September 1965), pp. 153-167.
- ④ Tarr, op. cit., pp. 324-325, Appendix D. 表表ト算出。
- ⑤ Ibid., pp. 72-73, 75-77.
- ⑥ Ibid., p. 76.
- ⑦ Louise C. Wade, *Graham Taylor: Pioneer for Social Justice, 1851-1938* (1964), pp. 74-77. 主なトビトナチ市民連合ト算出。経験からナルト・M・ノースリムは、革新主義期ト大企業経営者トナチ体制合理化運動を代表した全国市民連合の結成ト着手ト。
- ⑧ Weinstein, op. cit., pp. 7-8.
- ⑨ Lincoln Steffens, *The Shame of the Cities* (1904, 1957), pp. 167-169.
- ⑩ Tarr, op. cit., pp. 80-87. Stanley P. Caine, "The Origins of Progressivism", in Lewis L. Gould ed., *The Progressive Era* (1974), pp. 28-29.
- ⑪ Steffens, op. cit., p. 162. Joel A. Tarr, "William Kent to Lincoln Steffens: Origins of Progressive Reform in Chicago" *Mid-America*, XLVII (Jan. 1965), p. 50.
- ⑫ David P. Thelen, *The New Citizenship: Origins of Progressivism in Wisconsin, 1885-1900* (1972), pp. 55-85.
- ⑬ Jane Addams, *Twenty Years at Hull-House* (1910, 1960), pp. 122-123.
- ⑭ Wade, op. cit., p. 127.
- ⑮ Graham Taylor, *Pioneering on Social Frontier* (1930), p. 29.
- ⑯ Pierce, op. cit., pp. 204-205, 502; Grab and Brown, op. cit., p. 219.
- ⑰ Tarr, "William Kent to Lincoln Steffens", p. 50; Steffens, op. cit., p. 168.

④ Tarr, *A Study in Boss Politics*, pp. 68-69.

⑤ 「マッカーシーは、そのような例から、投票者連盟がキリスト的・反移民主義的なメトロポリスの主張に反対する。」 Michael P. McCarthy, "The New Metropolis: Chicago, The Annexation Movement, and Progressive Reform", in Esher and Tobin eds., op. cit., pp. 43-54, 183 note. しかしこれは、連盟のメトロポリスチックな戦略の結果を解する事が可能である。そのような戦略によらば、移民・労働者の都市メトロポリスの政治的成功は期しなかった。 Steffens, op. cit., p. 171; Edward R. Kantowicz, *Polish-American Politics in Chicago, 1888-1940* (1975), pp. 60-61.

四 新しい改革派の出現

投票者連盟を中心とした改革運動は——「トラスト・プレス」の宣伝力にも支えられて——共和党内のボス勢力に対し重大な障害を形造った。一九〇〇年、ロリマーは連邦下院の議席を失い、〇二年にはかろうじて議席を回復したものの、同年の市長選挙では、彼が推したスチュアート候補が敗れ、翌〇三年には、ロリマー派が最後まで抵抗した、シカゴ市に市街鉄道の市有を許可する法案が、州議会で圧倒的賛成のうちに可決された。ロリマーの威信低下、共和党衰勢のなかで、多くの党員が党の再編を主張しはじめた。^① 同年、すでに離反したハーツ、ピーズに加えて、ロリマーの最重要の同盟者であったチャールズ・デニンが彼から離反し、投票者連盟ほかの市民勢力と反ロリマー派の政治家の支持を受けて、州知事に立候補するにいたる。デニンは、一八九二年に州下院に当選して以来ロリマー勢力に加わり、市南西部のスカンジナビア系市民の間で地盤を築いた。九六年、一九〇〇年、彼はロリマーのクック郡マシンの支持で地方検事に当選し、ロリマー・マシンに忠実でありながら、なお改革派から清廉で有能との評価を得ていた。ロリマーは、彼を「トラスト・プレス」に身売りした裏切り者と非難したが、翌〇四年のクック郡党大会代議員の選挙ではデニン支持派に敗北を喫し、

⑥ Tarr, "William Kent to Lincoln Steffens", p. 55.

⑦ Steffens, op. cit., p. 184; Tarr, *A Study in Boss Politics*, pp. 69-70. cf. Samuel P. Hays, "Political Parties and the Community Society Continuum", in William N. Chambers and Walter D. Burnham, eds., *The American Party Systems: Stages of Political Development* (1967), pp. 176-181; Samuel P. Hays, "Politics of Reform in Municipal Government in the Progressive Era", *Pacific Northwest Quarterly* L.V, (Oct. 1964), pp. 161-163.

⑧ Tarr, *A Study in Boss Politics*, p. 67.

一八九六年以来はじめてクック郡共和党の支配権を失った。州の共和党史上最長を記録した州党大会でも、デニンがついに指名を獲得し、ついで民主党候補ストリンガーに大差をつけて州知事への当選を果たした。^②

しかし、こうした改革勢力が市のボス・マシンを一掃したわけではない。ロリマーは、クック郡の共和党指導権を失ったものの、ウエスト・サイドのマシンを維持し続け、これを足掛りに徐々に勢力を回復し、一九〇九年には州議会における連邦上院議員選出を行詰りに陥入れ、ついに自ら連邦上院の議席を獲得するにいたる。民主党の側でも、ケンナとカフリンのマシンや、ジョニイ・パワーズのそれだけでなく、^④ロリマーと組んだロジャーク・C・サリヴァンのマシンが健在であった。サリヴァンは、シカゴ初のアイルランド系カソリック市長ホプキンスのあとを継ぎ、投票者連盟など改革派の攻撃にさらされながらも、アイルランド系市民を中心とした強力なマシンの建設に成功し、党の長老ブライアンの再三の非難にも動じない、全国的に有名なボスとして生き残った。^⑤

のみならず、すでにのべた改革者たちの多くと同様に、旧来のアメリカ人で中産層の出でありながら、移民大衆の支持を獲得し、しかも改革的立場にも立つ新しい型の政治家が出現しつづつあった。一八九七年から五期市長職を確保した民主党のカーター・ハリソン二世がそれである。彼は旧南部出身の前市長（一八七九―八五、一八九三―九五）の息子で、ドイツで教育を受け、アイルランド系カソリックの女性と結婚した。彼の政治的成功は、父の政治的遺産、彼の経歴が暗示するようなドイツ系、アイルランド系ほかの移民グループへのアピール、また父と同様の「開かれた街」^{ワイド・オープン・シティ}の主張だけによるものではなかった。^⑥彼は、移民の政治的登用をマシンないし政党の得票のための便宜的手段としてでなく、彼らをアメリカに受入れ、統合する新しい原理として理解していた。彼は言う。

「われわれの国は、彼ら（新来の移民）にとって異郷である」。見知らぬ言語と習慣のこの地で、彼らは「歓迎されているのか、否か」の不安にさいなまれる。おずおずと市民権を獲得しても、「彼らがわれわれの間で本当に求められているかどうか、全然確かでないために、彼らは、あるいは何かの不運でこの市民権を失うのではないか、と恐れている」。「そ

の時、彼らの一人へのある地位の任命が、恐らく最もとるに足らぬ種類のそれが到来する。一瞬にしてすべてが変る。確かさ、安全さが彼らのものとなる。今や、そしてこれ以後、彼らは、自分がその旗の下で働き生きる政府の一部分に、その一片に、その一組織となる。「彼らがわが国の公的生活の中である地位に価する、という保証を与えることほど、これらの人々の間に、良き市民精神、真のアメリカニズムを確立するものはない」。

このような認識は、ヤンキー・プロテスタントの政治倫理を移民大衆に「たたき込む」こと、あるいは、彼らが旧来のアメリカ人プロテスタントのレベルに引き上げられるまで、彼らの政治参与を阻むことを望んだ、投票者連盟的改革派のそれとは大きく異なる。ハリソンは、特定の価値観の強制なしに多民族社会を統合する民主的原理を語っていたのである。しかもハリソンは、市のボス勢力と対抗した。彼は先述のサリヴァン・マシソンと激しく争い、ロリマーと結んだヤンキーズの野望にとどめをさす役割を演じただけでなく、公共的企業の料金引き下げ、八時間労働法、市職員の組合結成を支持し、市政府の社会的サーヴィスの拡大を主張した。要するにハリソンは、旧来のアメリカ人中産層に属しつつ、市の移民・労働者大衆への福祉と、彼らの市政参与を拡大する方向でのアピールによって成功した、新しい型の改革政治家に属した。

改革気運の高まりとハリソンのような政治家の出現は、民主党のマシソン政治家自身の転換をもうながした。ニューヨークのアル・スミス、ボストンのウォルシュに当るシカゴ民主党のダンの出現がそれである。エドワード・F・ダンにはフェニアンを父にもつアイルランド系二世で、ダブリンのトリニティ・カレッジを卒業した。したがって彼は、スラム育ちでなく一般のアイルランド移民よりも高度の教育を有したが、忠実な民主党員として、判事、大統領選挙人、党全国大会代表と順調に党組織内を上昇し、概してハリソン派に属したが、一九〇五年、党の市長候補の指名をもちとり、以後、民主党の指導権をサリヴァン、ハリソンと争うにいたった。

一九〇五年の市長選挙では、共和党は、「街路を人民のものに」をスローガンに市電会社と結ぶボス勢力と戦ってきた改革派のチャンピオン、ハーランを指名したが、ダンには市街電車の即時市有を掲げて、当選をもちとった。市長としての

ダンは、市電市有の戦いには成功しなかったが、市電会社への営業認可の条件を改善し、一九一二年には、シカゴ市ほか州内の都市部での得票によって、現職の共和党革新知事デニンと革新党候補フランクを破って、イリノイ州知事に当選した。彼の州政は印象的な労働・福祉立法、企業規制の進展を印した。公務員の老年年金、鉱山・鉄道労働者の保健・安全基準の改善、労働者への低利融資、ミシシッピ河以東では最初の婦人参政権、などの立法が成立し、憲法修正第十七条（連邦上院議員の直接選挙）も批准され、州内の市自治体に公共的企業の市有を認め、また州の公共企業規制委員会の設立を定めた法律も成立をみた。その他、立法化にはいたらなかったが、労災補償、女性労働者のための最低賃金制、失業救済、税制改革、保険会社や鉄道への規制などの戦いも進められた。他方彼は外国系市民を多数公職に登用し、禁酒立法、倫理規制の立法に反対し、政府の役割は人民の生活への積極的援助にあると明確に主張した。それゆえ、イリノイ州労働総同盟は一九一六年、彼の再選を全面的に支持したのである。

明らかに、イリノイ州の革新主義改革のピークは、州知事ダんと、彼を支持したシカゴ市他の外国系市民の代表たちによってもたらされた。にもかかわらず、ダンは、禁酒・倫理規制立法に反対したアイルランド系カソリックであり、政治腐敗には染まらなかったが、いわゆるボス・マシンの移民複合体の範疇に該当した。彼は、好んでアメリカ社会のコスモポリタン性を論じ、「イギリスでなく、ヨーロッパがアメリカの母国だ」と説き、ハイフン付きアメリカ人全体の代表たる立場をとったのである。ハリソンとダンの出現は、投票者連盟や共和党改革派とは異なる、移民・下層大衆を代表する改革勢力の出現を意味した。それは、トレドのジョーンズ市長、デトロイトのピングリー市長らとともに、人民の政治参与を拡大し、社会福祉をめざす方向での改革と社会統合を志向したのである。

一九一一年のシカゴ市長選挙は、このような二つの改革勢力の衝突を意味した。ハーランの敗北と政治的没落のちてヤンピオンを失っていた共和党革新派は、この年、シカゴ大学の政治学教授チャールズ・メリアムに注目した。メリアムは市議会の蔵出委員会の長として市政の浄化と能率化に努めてきたが、この年のシカゴ市長選挙を、十二年の革^{プロGRESSIVE}新^{PARTY}党

結成につながる全国の共和党革新派の戦いに結合しようと望んだ。彼は市政の能率化、計画的な市街建設、市の自治機能の拡大、公共的企業・市街電車問題の公正な解決を掲げ、とりわけ、マシンと政治腐敗の排除を主張した^⑭。

民主党の側では、ハリソン二世が再出馬し、前市長ダンとサリヴァン派が推すウエスト・サイドの銀行家グラハムを党首選で破って、指名を獲得した。ハリソンも、全国的な革新風潮の盛り上りに同調し、「全人民のための能率的な市政」、公共的企業への厳しい規制、公営のレクリエーション地区を付した港湾施設の整備、市自治の強化を掲げ、とりわけガス料金を一〇〇〇立方フィート当り七〇セントに引下げよ、と主張した^⑮。

ハリソンの七〇セント・ガスの主張は、メリアムの抽象的な訴えよりも、移民・下層民衆によりアピールしうる具体性を有したが、いま一つの潜在的だが大きなイシューがハリソンを利した。全国的な革新気運の高まりとともに盛り上った禁酒法運動がそれである。同時に不況中沈滞していた宗教・文化的対立も、景気回復とともに急速に盛り上りつつあった。非プロテスタント移民^⑯「酒場」^⑰マシンを一括してアメリカ体制への脅威とみなす禁酒法運動は、農村のみならず都市の中産・プロテスタント市民の支持をうけ、一九〇七年、イリノイ州議会も、最小単位の自治体にまで禁酒法選択の住民投票を許す法案を可決した^⑱。シカゴの一六〇の投票分区が酒場閉鎖に踏み切り、翌八年、市の半ば近くが酒場を失った^⑲。

反酒場連盟が推進したこのような動きに対し、諸移民グループは「個人的自由」^⑳維持のために結集し、地方自治擁護^㉑連合^㉒協会^㉓を結成して対抗した^㉔。あるボヘミア語新聞がのべたように、禁酒法運動は、市民の大多数を構成する外国系市民に対し、「何を飲むかだけでなく、あらゆる時に何をなすべきかを命令せんとしている」、いわば彼らの生活スタイル全体の変革を強制している、と映じたからである。一般に政治家は——改革派の政治家も——このいづれにせよ傷つき易いイシューを回避しようと望んだ。しかし改革派市民組織・共和党改革派の社会的性格は、禁酒法運動の支持層と高度の共通性を有した。改革派知事デニソンは、このイシューで中立的態度を保とうと努めたが、州議会のデニソン派議員の多くは禁酒法支持であり、彼を支持した新聞人の筆頭ロソンも、彼のシカゴ・デイリー・ニューズの日曜版

を出さず、酒類の広告を拒んだ禁酒論者・安息日厳守論者であった。^① 共和党革新派の政治家は、彼自身の立場はともかく、支持層の中に、禁酒法を挺子とする移民のアメリカ人化を、また移民と悪徳に満ちた都市生活の浄化を求めた有力な一派を含んだがゆえに、禁酒法支持に傾き、あるいは安息日厳守や酒場への攻撃のために、警察力の動員を求めざるをえなかった。そのため一九一一年の選挙においても、地方自治擁護連合協会は、共和党革新派の候補メリアムを信頼しえぬ候補とみなし、「個人的自由」の党に属し「開かれた街」を唱えてきたハリソンを安心できる候補として支持した。^②

結果は一七、〇〇〇票の小差ではあったが、ハリソンの勝利に終わった。ロリマー派がメリアムのために働かなかった要因も考えられるが、民主党の側でもダンとサリヴァンの勢力は不活潑であった。ハリソンは、「一片の疑いもなく」、その勝利を「外国系市民の支持」に負うとのべたが、事実、ボヘミア系の七〇、ポーランド系とイタリア系の各六九、ユダヤ系の六三、ルーセントが彼に投票した。ちなみにこの数字は、一九〇八年の民主党大統領候補ブライアン——福音主義的プロテスタントの彼は熱烈な禁酒主義者でもあった——へのこれらの民族グループの投票率を、それぞれ一七、一九、一二、一一上廻っていた。^③

- ① Tarr, *A Study in Boss Politics*, pp. 114-126.
- ② *Ibid.*, pp. 126-127, 134-141.
- ③ *Ibid.*, pp. 199-220.
- ④ Lloyd Wendt and Herman Kogan, *Bosses in Lusty Chicago: The Story of Bathhouse John and Hiny Dink* (1943, 1974); Humbert S. Nelli, *Italians in Chicago, 1880-1930: A Study in Ethnic Mobility* (1970), pp. 91-104.
- ⑤ Harold Zink, *City Bosses in the United States: A Study of Twenty Municipal Bosses* (1930, 1968), pp. 291-301.
- ⑥ Kantowicz, *op. cit.*, pp. 72-76.
- ⑦ *Ibid.*, p. 74.

- ⑧ John D. Buenker, *Urban Liberalism and Progressive Reform* (1973), pp. 28-29, 31.
- ⑨ John D. Buenker, "Edward F. Dunne: The Urban New Stock Democrat as Progressive" *Mid-America* L (Jan. 1965), pp. 3-6.
「メンデルソーンと『またある種族がサリヴァンとの争いが、政治路線の争いでは、むしろ権力争いと考えられる。』」
- ⑩ Kantowicz, *op. cit.*, p. 77; Buenker, *Urban Liberalism*, p. 37.
- ⑪ Buenker, "Edward F. Dunne", pp. 7-20.
- ⑫ Buenker, *Urban Liberalism*, pp. 185-186.
- ⑬ ホリザ、この種の改革派が「ニューヨークのヤンス・ロー、サン・フランシスコのシヤーマス・D・フエレンなど代表される改革派——

「構造改革」タイプ——と対照して、「社会改革」タイプと名付ける。シカゴの投票者連盟は「構造改革」タイプと考へる。 Melvin G. Holl, *Reform in Detroit: Hazen S. Pingree and Urban Politics* (1969), pp. 157-181.

⑭ Kantowicz, op. cit., pp. 77-78.

⑮ Ibid., pp. 78-79.

⑯ Tarr, *A Study in Boss Politics*, p. 184.

⑰ James H. Timberlake, *Prohibition and the Progressive Movement, 1900-1920* (1963, 1970), p. 150.

⑱ 同連合協会は、一九一九年には、一〇八七の小教民族組織、メン、一総数約二五万を擁した。同協会の書記となり、それを手掛りに強固

五 結 び

一九一五年の市長選挙に際し、ハリソンは党予選でサリヴァン・マシンの候補に敗れ、後者はまた、ロリマー・マシンを継承した共和党候補トムソンに敗れた。移民グループと大衆へのアピールに長じ、とくに増加中の黒人票を握ったトムソンの出現は幾つかの興味ある問題を提示するが、本稿の考察は、彼の出現までのシカゴ市政からする暫定的結論をもって終りたい。

まず、十九世紀末の工業化・移民流入、都市自体の拡大にともなう都市生活の動揺、分裂、政治制度の立ち遅れに最初に対処したのは、いわゆる革新主義改革者ではなく、彼らの第一の敵であったボスマシン自体であった。それは物質的・日常的利益の配付と移民・下層大衆の政治参与の促進を通じて、インフォーマルな政治権力機構を形成し、それによって都市政治と都市社会の一定限度の統合と秩序形成を成しとげた。合衆国の都市政治の二〇世紀への機能的脱皮をまず推進したのは、ボスマシンであった。それは共和党にとっては、基盤の狭い特定の価値観に立つ「改革の党」から、より

な民主党マシン——それは大不況期にシカゴを完全に支配した——を築いたのが、ボスマシンの移民アンソニー・J・サーヤマトである。 John M. Allswang, *Bosses, Machines, and Urban Voters: An American Symbiosis* (1977), pp. 106-109.

⑲ Tarr, *A Study in Boss Politics*, pp. 174-175.

⑳ Ibid., p. 181.

㉑ Kantowicz, op. cit., p. 80.

㉒ Ibid., p. 80-83. トンソン票の差母 Allswang, *A House for All Peoples*, Appendix Table A: 2, Ethnic Area Voting, 1890-1916 より算出。

広く諸階級・諸グループの支持を集めうる機能的統合政党へと脱皮する道を、したがって二〇世紀のブルーラルなアメリカに適應しうる道を、指し示した。

一八九三年恐慌による体制危機感の中で、「新しい市民意識」に支えられた市政改革運動が出現したが、それは、ボス・マシンが進めてきた都市の政治的・社会的統合を、その代価であった政治腐敗と汚職を除去するだけでなく、より徹底した形で、つまり特定の価値観と組織モデル——ヤンキー・プロテスタント的政治倫理と企業モデルの市政の能率化と合理化——をもって、遂行しようとするものであった。しかし、このような改革路線は、のちに旧来のアメリカ人が多数を占める同質的小都市では成果をあげるものの、大量の新移民を受け入れ、彼らの社会的・政治的成熟をむかえる二〇世紀の大都市的アメリカの現実には、適合し難い^②。

ここに、改革派が提唱した提案のかなりの部分——とくに経済規制や政府の社会的機能の拡大——を受け入れつつ、特定の価値観による社会的統合を拒否し、移民・下層大衆の政治参与と彼らへの政治福祉の拡大を挺子に政権を獲得・維持しようとする新たな方向が、いわゆる移民・マシン複合体の側から——それゆえ概して、「移民の党」である民主党の側から——打ち出される。およそ革新主義改革の時期を、都市的でブルーラルな二〇世紀のアメリカの現実への政治的・制度的対応の開始期、と規定するならば、より具体的にはニューディールへとつながる変革の開始とするならば、このような対応と変革の推進力は、旧来のアメリカ人・中産層のいわゆる革新主義者の側からよりも、むしろ移民・ボス・マシン複合体の側から出現したとみなしうるのではないか。

① *Allswang, Bosses, Machines, and Urban Voters*, pp. 96-105.

黑人黨の動向については Allan H. Spear, *Black Chicago, The Making of A Negro Ghetto, 1890-1920* (1967), pp. 120-126, 186-

200

② Harold A. Stone, Don K. Price and Kathryn H. Stone, *City Manager Government in the United States: A Review After Twenty-Five Years* (1940), pp. 31-50, 180-235.

(広島大学総合科学部教授)

〔付記〕 本稿は昭和五三・五四年度科学研究費補助金（一般研究C）の交付による研究成果の一部である。

Urban Politics in the Progressive Era

—A case in Chicago—

by

Kosuke Shimura

Boss-controlled political machines during the Progressive years have been generally considered to be the manifestation of many evils brought about by such new phenomena of the late nineteenth-century America as rapid industrialization and urbanization, as well as a large influx of immigrants. The elimination of these machines was an overriding objective of diverse groups of reformers at the time.

However, quite a different interpretation can be made if we look at the political process in Chicago. This article argues that it was these political bosses that first coped with the socio-political disruptions and conflicts which were at the roots of the urban problems of the day, and brought into the urban communities a certain degree of social and political integration.

The urban reformers who launched fierce attacks on urban bosses pursued more thoroughgoing integration of urban communities, social integration primarily based on the Yankee-Protestant values and political integration modeled on the system of business corporations. They failed largely because they could not come to grips with the social realities of a emerging pluralistic America.

In the meantime a new type of reform movement emerged that aimed at restructuring urban society through extending welfare programs to immigrant groups and promoting their participation in political processes while refusing socio-political conformity as much like bosses. It seems to be this type of reform movement that culminated in the New Deal reform.